









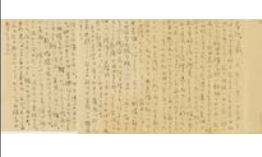






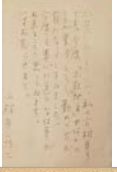






市立小樽文学館 小林多喜二資料（令和5年3月）

資料画像	資料名	制作年	作者/出版社	詳細
	水彩画「静物」（仮題）	1923年ごろ	小林多喜二	小樽高等商業学校時代の絵
	水彩画「忍路湾」（仮題）	1923年ごろ	小林多喜二	小樽高等商業学校時代の絵
	水彩画「石狩川河口」（仮題）		小林多喜二	小樽高等商業学校時代の絵と思われる
	水彩画（若竹町の自宅付近）		小林多喜二	北海道拓殖銀行在職時代の絵
	「小林セキ（多喜二母堂）像」		富樫正雄	油彩・キャンバス
	「小林多喜二肖像」		富樫正雄	油彩・キャンバス
	小林多喜二デスマスク（複製）			ブロンズ
	石本武明宛書簡（はがき）	1921年6月14日消印	小林多喜二	修学旅行へ行っている知らせ
	石本武明宛書簡（封緘葉書）	1921年7月20日消印	小林多喜二	
	石本武明宛書簡（はがき）	1921年7月26日消印	小林多喜二	
	石本武明宛書簡（封緘葉書）	1921年8月1日消印	小林多喜二	

	資料画像	資料名	制作年	作者/出版社	詳細
12		石本武明宛書簡（封緘葉書）	1921年8月15日 消印	小林多喜二	
13		石本武明宛書簡（はがき）	1922年3月5日 消印	小林多喜二	
14		西丘はくあ宛書簡（はがき）	1922（大正11）年4月5日 消印	小林多喜二	
15		中野重治気付小林多喜二宛書簡（はがき）	1931年7月4日	伊藤信二	伊藤信二は庁立小樽中学校を中退し、北海製罐の労働者となる。3.15事件で検挙される。小林多喜二、風間六三とナップ小樽支部を結成。多喜二に「工場細胞」の素材を提供した。小説「ゴモの家族」など。1932年没。
16		雨宮庸蔵宛書簡（はがき）	1929年8月30日 消印	小林多喜二	『中央公論』編集者雨宮庸蔵に「不在地主」進捗状況の知らせる
17		雨宮庸蔵宛書簡	1929年10月24日 消印	小林多喜二	「不在地主」が大幅に削除され『中央公論』に掲載されたことを受け全文を再掲載するよう依頼。 全文掲載が受け入れられなかったためのちに『戦旗』で掲載
18		雨宮庸蔵宛書簡（はがき）	1929年11月29日 消印	小林多喜二	北海道拓殖銀行解雇を知らせる
19		酒匂親幸宛書簡（はがき）	1928年11月24日 消印	小林多喜二	酒匂親幸は北海道拓殖銀行勤務。1924年11月に小樽に転任。歌人であり『原始林』創刊に参加。歌会には学生だった小林多喜二も来ていた。1925年、多喜二の旧友片岡亮一らと『新樹』を発行。 文壇デビュー作「一九二八年三月十五日」が賞賛を得たことについて
20		酒匂親幸宛書簡（はがき）	1929年7月17日 消印	小林多喜二	「蟹工船」が帝国劇場で上演されるが見に行けないので観てほしい
21		田口タキ宛書簡（はがき）	1933年1月20日 ごろ	小林多喜二	久しぶりに訪ねたがタキが外出中だったためタキの母に渡した絵はがき。転々とする生活の中また訪ねるが当てにしないでほしいと書かれている。かつての恋人田口タキへの最後の言葉となった。
22		大熊信行宛書簡	1933年7月18日	中條百合子	かつて小樽高商に勤め多喜二との交流もあった大熊信行に小林多喜二全集刊行の援助を求めるもの

	資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
23		江口渙宛書簡	1962年1月11日	石井友幸	石井友幸は生物学者。多喜二虐殺の日に築地署の隣の房にいた（多喜二は第二房、石井は第一房）。 小林多喜二の死について当日留置所にいた同志らから聞いたことを発表した江口に対し、自らの見聞きした事柄を手紙にしたため書き送った。 築地署留置所内の見取り図あり
24		江口渙宛書簡	1967年3月8日消印	石井友幸	
25		江口渙宛書簡（はがき）	1967年3月21日消印	石井友幸	
26		風間六三宛書簡	1965年3月4日	本郷新	小林多喜二文学碑の設計案について
27		『新機械派』第一年第一号（昭和5年3月5日）掲載のアンケート「文学に於けるメカニズムは如何に発展すべきか」に寄せられた回答はがき	1929年年 11月消印	【回答者】上泉秀信、神原泰、板垣鷹穂、中野重治、中河与一、雅川晃、岩藤雪夫、外山卯三郎、久野豊彦、葉山嘉樹、伊藤整、新居格、飯島正、今東光、岩村忍	
28		「党生活者」伏せ字なしの校正刷	1932年	小林多喜二	貴司山治から中野重治に渡され戦中ひそかに保存された。封筒の表書きは中野重治自筆
29		原稿「若い頃の多喜二との思い出」	1983年	石本武明	6枚 1983年10月市立小樽文学館特別展「多喜二の青春—その彷徨と発見」展パンフレットに掲載
30		原稿「『安子』について」		佐多稲子	5枚 戦後最初に出版された日本評論社版の全集月報（8）の原稿
31		『蟹工船』戦旗社改訂普及版書店用ポスター			1枚
32		マルクス五十周年祭記念公演「沼尻村」リーフレット	1933年		1枚 1933年3月18日～31日、築地小劇場 大沢幹夫脚色












資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
	「読売新聞」	1933年3月18日	読売新聞社	「転換時代」（「党生活者」）広告
	1933年3月15日の労農葬に先がけ、小林多喜二虐殺に抗議し、小樽でまかれたビラ	1933年		1枚
	小樽港湾争議関係ビラ 「港湾労働者諸君」		日本プロレタリア文化連盟小樽地区	1枚
	「無産者新聞」第188号	1928年11月10日	無産者新聞社	
	「文学新聞」第27号	1933年2月1日	日本プロレタリア作家同盟出版部	
	檄文（「米よこせ会」への暴圧に抗議）	1932年11月	日本プロレタリア作家同盟札幌支準書記局	
	檄文（同志小林多喜二の虐殺に抗議）	1933年2月25日	ナルプ札幌支準執行委員会	
	「コップ札幌地協ニュース」No.4	1933年3月28日	日本プロレタリア文化連盟札幌地区協議会書記局	
	「文学新聞」第29号（復刻）	（元資料） 1933年3月10日発行 （復刻）1980年	（元資料）日本プロレタリア作家同盟出版部 （復刻）ほるぶ社	ほるぶ出版の「小林多喜二文学館(初版本による複製全集)」付録
	小樽映画協会 小樽映画協会ドラマリーグ会員名簿	1927年1月		小林多喜二が所属した会の名簿。田口タキ子の名もある。
	辞令書割印簿	1923年1月6日	北海道拓殖銀行	拓殖銀行資料

	資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
44		辞令簿	1925年1月	北海道拓殖銀行	拓殖銀行の辞令簿
45		北海道拓殖銀行職員表 昭和三年一月一日現在	1928年	北海道拓殖銀行	
46		北海道拓殖銀行職員表 昭和四年七月一日現在	1929年	北海道拓殖銀行	
47		除籍謄本			小林多喜二の生没年月日が記載されている
48		北海道庁立小樽商業学校 大正九年度卒業生二関スル調査			
49		小樽高等商業学校同窓会会員録／同窓会々員録	①1925年10月1日 ②1926年11月1日 ③1930年12月2日	小樽高等商業学校同窓会	小樽高等商業学校同窓会会員録（2冊①大正十四年十月一日現在②大正十五年十一月一日現在） 同窓会々員録（1冊③昭和五年十一月一日現在）
50		小林多喜二碑建設 埼玉県募金者芳名帳	1964年		
51		小林多喜二文学碑、除幕式以後募金した人のリスト	1967年	風間六三	
52		小林多喜二文学碑文拓本			






資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
<p>53</p> 	<p>元北海道拓殖銀行行員故小林多喜二 創作集</p>		<p>柴田徳秋</p>	<p>【目録】 写真、短歌並びにサイン／(舞台)「北緯五十度以北」並びに「不在地主」の グラフ／北見三郎「サインの印象」(『東京朝日新聞』1932年12月12日) 『文学時代』1930年1月号に掲載された多喜二を描いたイラスト／川口浩「小 林多喜二論」(『人物評論』1933年4月号)／立野信之「小林多喜二の事」 (『文藝春秋』1933年4月)／杉山平助「リベラリズム擡頭」(『文藝春秋』 1933年4月)／徳永直「同盟の旗が折れた」(『東京朝日新聞』1933年2月 22日)／大宅壮一「作家としての死せる小林多喜二」(『読売新聞』1933年2 月22日)／大宅壮一「小林多喜二の死」(『時事新報』1933年2月22日)／ 小林三吾「兄多喜二を語る」(『人物評論』1933年4月)／【急死当時の諸新 聞記事】「プロ作家小林多喜二氏築地署で突然逝く」(『東京朝日新聞』 1933年2月22日)、「相次ぐ急死事件左翼に大衝撃」(紙名、日付なし)、「 死亡診断」(氏名、日付なし)、「老母半狂乱」(紙名、日付なし)、「出 世作は『蟹工船』」(紙名、日付なし)、「変死したプロ作家小林多喜二氏の 生立」(『北海タイムス』1933年2月24日)、「宮本顕治を追跡」(『東京朝 日新聞』1933年2月29日)、「プロ作家の遺骸三病院で解剖拒絶」(『北 海タイムス』1933年2月23日)、「小樽市内に過激デモ撒く」(紙名、日付な し)、「プロ作家の遺骨で其筋が鵜の目鷹の目」(『小樽新聞』1933年3月 10日)、「警官を尻目に下車した義兄」(『小樽新聞』1933年3月10日)、「 小林多喜二の追悼会に弾圧」(『小樽新聞』1933年3月8日)、「小樽署員 徹宵労働者戒厳」(『北海タイムス』1933年3月16日)、「プロ作家労働者断 然解消の弾圧」(『北海タイムス』1933年3月16日)、「三十六名検束」 (『北海タイムス』1933年3月16日)、「俳優を佐詰『沼尻村上演禁止小林の 労働者に弾圧』」(『東京朝日新聞』1933年3月17日)／『クラルテ』創刊 号／【論評】小林多喜二「プロレタリア文学の『大衆性』と『大衆化』につい て」(『中央公論』1929年7月)、小林多喜二「プロレタリア文学の新しい文 章に就いて」(『改造』1930年2月)、小林多喜二「断片を云ふ。」(『文学 時代』1930年10月号)、小林多喜二「文藝時評」(『中央公論』1932年6 月)／【作品の批評・其他】勝本清一郎「『蟹工船』その他」(『新潮』 1929年7月)、前田河廣一郎「同志レスルッスを案内する」(『改造』1930 年3月号)※「不在地主」評、稲田美津雄「現代文藝作品の法律的誤謬」 (『新潮』1930年5月)※「不在地主」評、廣津和郎「文藝時評」(『改 造』1930年3月)※「暴風雨警戒報」評、中村武羅夫「マルクス主義文學の存 在は可能であるか?」(『新潮』1930年5月)※「工場細胞」評、中村武羅夫 ほか「新潮合評会」(『新潮』1930年5月)※「工場細胞」評、窪川鶴太郎 「文藝時評」(『中央公論』1931年8月)※「独房」評、岡澤秀虎「プロレタ リア小説壇の現状」(『文学時代』1930年4月)／【新聞文藝時評】平林初之 輔「文藝時評」(『東京朝日新聞』1928年11月12日)、平林初之輔「日本の シンクレーア—小林君の『蟹工船』—」(『東京朝日新聞』1929年5月7 日)、蔵原惟人「作品と批評—蟹工船その他(1)」(『東京朝日新聞』 1929年6月17日)、蔵原惟人「作品と批評—蟹工船その他(2)」(『東京 朝日新聞』1929年6月18日)、片岡鐵兵「小説の技術について」(紙名、日 付なし)、宮島新三郎「文藝時評—壁小説と赤色レビュー」(紙名、日付な し)※「東俱知安行」評、中村武羅夫「『不在地主』と『セムガ』とを批評す (上)」(『読売新聞』1929年11月2日)、青野季吉「創作の中から その 若干を読んで」(紙名不明、1932年3月29日)※「沼尻村」評、川端康成「時 評—宿命 ※※派の『創作不振』」※※※部分欠損(『東京朝日新聞』 1932年3月31日)※?次の記事のメモとどちらを指しているか不明)※「沼尻村」 評、「豆戦艦 四月の雑誌」(筆者不明、『東京朝日』1932年3月31日)※ 「沼尻村」評、横手丑之助「豆戦艦 三月の雑誌(2)」(『東京朝日』 1932年2月22日)※「地区の人々」評、貴司山治「文藝時評 主要課題のこ それからの立遅れ、敗北(二)」(『時事新報』1933年3月3日) ※「地区の人々」評、西脇順三郎「文藝時評 小説家の型 小林氏の天分を惜 しむ」(『東京朝日』1933年3月30日)※「地区の人々」評、廣津和郎「文 藝時評2 おのづから襟を正す」(『読売新聞』1933年3月28日)※「転換 時代」評、林房雄「文藝時評 文學の聖火はプロ派で」(『読売新聞』1933 年3月3日)、神近市子「文藝時評 頼もしい新人」(『東京朝日』1933年6 月2日)／【文壇郷土誌】『誌々?』プロ文学篇113 『時事新報』、立野信 之登場 小林多喜二の劇(1933年4月?日)、ナップ結成直前小林多喜二上京 (4月20日)、三・一五を描き小林から蔵原へ(4月25日)、銀行を誠首され 小林多喜二上京(5月1日)、小林と蔵原との初対面の時のこと、小林サイン攻 め『戦旗』講演会で(5月3日)、大阪の会場で青年団を放逐、梅田のホテルで 片岡鉄兵検挙、小林も検挙さる五月二十日事件／小林多喜二君の実家に亡霊 (『小樽新聞』1933年7月16日)／【蛙の目】大場嘉三「蛙の目 作家同盟 の言論封鎖」(『時事新報』1933年4月13日)、草加新八「蛙の目 まつす ぐにならう」(1933年5月1日)、曾我八郎「蛙の目 小林多喜二に与へた志 賀直哉の手紙」(『時事新報』1933年6月5日)／春野遠「動くプロ文壇」 (『文藝春秋』1933年4月号)／小林多喜二の死について・・・(『人物評 論』1933年4月号)／小林多喜二の死とへたショック(『人物評論』1933年 4月号)／「文藝盛衰記 新興文學の巻(九)」(『東京朝日』日付不明)／ 【作品】「龍介の経験」(『極光』1925年8月25日作)、「女囚人」(1927 年3月8日作、『文藝戦線』1927年2月号)、「誰かに宛てた記録」(1928年 1月1日—3日作、『北方文藝』1928年6月号)、「東俱知安行」(1928年9月 5日作、『改造』1930年12月)、「一九二八年三月十五日」(1928年8月17 日作、『戦旗』1928年11月・12月)、「蟹工船」(1929年3月30日作、 『戦旗』1929年5月・6月号)、「不在地主」(1929年9月29日作、『中央公 論』1929年11月号)、「工場細胞」(1929年2月24日作、『改造』1929年 4月・5月・6月)、「オルグ」(1931年4月6日作、『改造』1931年5月)、「 独房」(1931年6月9日作、『中央公論』1931年7月)、「テガミ(壁小 説)」(1931年6月30日作、『中央公論』1931年8月)、「母たち」(1931 年10月11日作、『改造』1931年11月)、「沼尻村」(1932年3月8日作、 『改造』1932年4月・5月)、「転換時代」(1932年8月25日作、『中央公 論』1933年4月・5月)、「地区の人々」(1933年1月10日作、『改造』 1933年3月)</p>

	資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
54		母の語る小林多喜二	1928年5月	小林セキ(述) 小林廣(編)	2011年に書籍化されたものの原本。 小林廣は佐藤チマ夫妻と仲の良く小林セキ含め家族ぐるみの付き合いがあったが親戚ではない。
55		小林セキ遺筆(複写)			
56		パンフレット「小林多喜二略伝」	1933年3月25日	日本プロレタリア美術家同盟出版部	絵 岡本唐貴
57		小林多喜二のタプログラム	1947年2月27日	劇団人間座印刷物	「小林多喜二のタ」は1947年2月27日に、新日本文学小樽支部、日本共産党小樽地区文化部共催で北海ホテルにて行われた
58		小林多喜二絵葉書集	1973年	画 藤森茂男	4枚1組 日本共産党中央人民大学 夏季講座(小樽教室)開講記念 小林多喜二没後40周年
59		没後44周年、写真集「小林多喜二」出版記念、小林多喜二祭プログラム	1977年4月8日		
60		小樽市街1933	1977年11月	風間六三	
61		『小樽高商校友会誌』28号	1923年3月	小樽高等商業学校校友会	小林多喜二「継祖母のこと」所載
62		『小樽高商校友会誌』30号	1923年10月	小樽高等商業学校校友会	小林多喜二「ロクの恋物語」所載
63		『小樽高商校友会誌』32号	1924年3月	小樽高等商業学校校友会	小林多喜二「ある役割」所載

	資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
64		『尊商』第3号	1920年3月31日	小樽商業学校々友会	小林多喜二は当時17歳、本科2年生。 「習作二篇」（「病院の窓」「電燈の下で」）、詩「秋の夜の星」「秋が来た!!」所載。
65		『北方文藝』第5号	1927年10月発行	小樽高商文藝研究会	小林多喜二「残されるもの」所載
66		『新興文学』1923年7月号（複製版）	1977年	日本近代文学館	小林多喜二「藪入」所載
67		『新興文学』1923年1月号（複製版）	1977年	日本近代文学館	小林多喜二「健」所載
68		『クラルテ』創刊号	1924年4月	クラルテ社	小林多喜二が北海道拓殖銀行に勤めはじめた月に創刊した同人誌。誌名は人民戦線を唱えたフランスの作家アンリ・バルビュスの雑誌『クラルテ』（光明）に因む。 小林多喜二「暴風雨もよい」ほか所載。 1926年3月までに5冊発行された。
69		『クラルテ』第参輯	1924年9月17日	クラルテ社	小林多喜二が匿名で「赤い部屋」を執筆
70		『新機械派』第1年第1号（創刊号）	1930年3月5日	編集発行人勝見茂 小樽・新機械派編集所	武田暹、野口七之助、勝見茂らが中心となり小林多喜二や伊藤信二が加わった同人誌。 小林多喜二「『機械の階級性』について」（評論）所載。 創刊と同時に発売禁止を受け1号で終刊。
71		『プロレタリア文学』	1930年7月5日	白揚社	鹿地亘「小林多喜二の印象」所載
72		『プロレタリア文学』創刊号	1932年1月1日	日本プロレタリア作家同盟	小林多喜二「転形期の人々」（の一部、「六」に当たる部分）所載
73		『農民の旗』	1931年11月23日	新潮社	小林多喜二「戦ひ」（「不在地主」削除部分）所載
74		『新樹』第3集	1923年11月20日	新樹短歌会	小林多喜二「歴史的革命と芸術」（評論）所載

	資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
75		『戦旗』1928年11月号	1928年11月	全日本無産者芸術連盟	小林多喜二「一九二八年三月十五日」（一）所載
76		『戦旗』1928年12月号	1928年12月	戦旗社	小林多喜二「一九二八年三月十五日」（二）所載
77		『戦旗』	1929年5月	全日本無産者芸術連盟	「蟹工船（1）」掲載
78		『戦旗』	1929年6月	全日本無産者芸術連盟	発禁 「蟹工船（2）」掲載
79		『戦旗』1929年12月号	1929年12月	戦旗社	小林多喜二「戦ひ」（「不在地主」の『中央公論』で削除された部分）所載
80		『ナッブ』第1巻第3号	1930年11月10日	戦旗社	江口渙「左翼劇場「不在地主」を観て」、左翼劇場公演「不在地主」舞台写真、所載
81		『ナッブ』2巻2号	1931年2月15日	戦旗社	
82		『ナッブ』第二巻第十号	1931年10月8日	全日本無産者芸術団体協議会	小林多喜二「転形期の人々」所載（連載第一回）挿絵大月源二
83		『東俱知安行』 新鋭文学叢書	1931年3月16日	小林多喜二／改造社	献辞あり 「妹へ！幼き日の思い出に 小林多喜二 一九三一・三・二六」
84		『一九二八年三月二十五日』	1930年5月	小林多喜二／戦旗社	装幀、岡本唐貴
85		『蟹工船』	1929年11月8日改訂版発行 1929年12月1日15版発行	小林多喜二／戦旗社	

	資料画像	資料名	制作年	作者／出版社	詳細
86		中国語版『蟹工船』	1930年4月15日	小林多喜二著／潘念之訳 上海大江書舗 人民文学出版社	中国語版『蟹工船』。献呈本「敬贈 小笠原克先生 葉涓渠 1981.10.7」 最も早く紹介された海外版。国民党政府により発禁。その後続けてロシア語、ドイツ語、英語版も刊行された。
87		『防雪林』	1948年8月1日	小林多喜二／日本民主主義文化連盟	
88		『不在地主』	1930年1月20日	小林多喜二／日本評論社	
89		『工場細胞』	1930年7月25日（第五版）	小林多喜二／戦旗社	
90		『日本プロレタリア作家同盟叢書第二編 沼尻村』	1932年8月30日	小林多喜二／日本プロレタリア作家同盟出版部	
91		『転形期の人々』	1933年9月8日発行／1933年9月14日 四版発行	小林多喜二／改造社	装幀、山村一平
92		『地区の人々』	1933年5月	小林多喜二／改造社	
93		昭和二年六・七月 小樽港湾争議一覽表		北海道庁警察部	
94		『荒絹』	1921年2月23日	志賀直哉／春陽堂	小林多喜二旧蔵・自筆署名入り
95		『クラルテ』	1923年4月	アンリ・バルビュス著 小牧近江・佐々木孝丸訳 足助素一発行 叢文閣	
96		蟹工船 改訂普及版	1930年3月18日	小林多喜二／戦旗社	

	資料画像	資料名	制作年	作者/出版社	詳細
97		『プロレタリア文化』11月号(3巻8号)	1933年12月10日	日本プロレタリア文化連盟出版所	『小林多喜二全集』(全7巻)の広告掲載
98		「一九二八年三月一五日」ドイツ語訳初版	1931年		
99		『アサヒグラフ』第8巻第4号	1932年1月20日	朝日新聞社	火鉢に手をかける小林多喜二の写真、所載
100		『日本文学アルバム 小林多喜二』	1955年4月	筑摩書房	小林セキ(多喜二の母)の署名入り
101		『三太郎の日記』第8版	1918年5月1日	阿部次郎 岩波書店	小林多喜二旧蔵、書き込みあり
102		『The Factory Shio』	1973年	ワシントン州立大学出版局 訳者 Frank Motofuji	「蟹工船」「不在地主」収録
103		『The Cannery Boat』	1933年8月		「蟹工船」「一九二八年三月一五日」「市民のために」収録。多喜二以外にも藤森成吉、黒島伝治、片岡鉄兵、貴司山治、徳永直、林房雄の短編を収録。